

## ポスト・コロナ社会におけるバックエンド部会

2019年度バックエンド部会長

小崎 完

2019年度のバックエンド部会長を務めさせて頂きました。3月末の退任から少し間が開いてしまいましたが、その最後の任務として本稿の筆をとりました。まずは、在任期間中に、ご指導、ご支援を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。また、力が及ばず、ご迷惑・ご心配をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

2019年は平成から令和へ改元し、多くの人々が新たな時代の到来を期待した年であったかと思います。しかし、年末から広がり始めた新型コロナウイルスは残念なことに瞬く間にパンデミックとなってしまいました。本稿執筆時においても、我が国では非常事態宣言は解除されたものの完全な終息には遠く、海外の多くの国々ではいまだその猛威は収まっていません。

この新型コロナ感染症によって、私たちの日常生活は大きく変わりました。「不要不急」との言葉が頻繁に使われているように、新型コロナ感染症の出現によって、本当に必要なものと、慣例上そうしてきたものの区別が明確になったように思えます。私の職場においても、他の職場と同じように、会議はすべてオンラインとなりました。出張者が多く、定数を満たすことに苦勞していた会議もオンラインでの開催が可能となりました。今までの日程調整の苦勞は何だったのだろう、と（オンライン上で）苦笑しあう始末です。同じように、すべての授業がオンラインとなりました。従来、オンラインの授業は、学生のネット環境や機器操作の習熟度に個人差があることなどが懸念され、また、学生の反応から理解度を推定できず、質問等への即応が難しいなどの理由から、その導入には慎重な意見も少なからずありました。しかし、新型コロナ感染症によって、否応なしに全面的な導入となりました。その結果、学生はほぼ問題なく対応し、オンライン講義に戸惑っているのはシステムに不慣れな我々教員側です。我々が過小評価していただけで、すでに若い世代には、情報通信技術を活用した教育・学習支援を受け入れる下地が十分整っていたと言えます。

実は、北海道大学では、コロナ禍のさなかの2020年3月12日から5月22日まで、MOOC（大規模公開オンライン講座）『放射線・放射能の科学』を開講しました。これは放射線の基礎から、放射線利用、原子力発電、そして廃止措置と放射性廃棄物処分までの内容を8名の教員が5週間にわたってe-learningで講義する、受講料無料の講座です。新型コロナ感染症の影響が懸念されましたが、開講してみると、典型的な理系の講座にもかかわらず、受講登録者は2,400名を超えました。この数は、大学での40名のクラスだと、60年分の受講生に相当します。これは、オンラインの教育がすでにここまで広く普及していること、また、受講生の数の点では、従来の対面型の教室での講義を大きく凌駕することを示しています。一方、この受講生数は、コロナ禍で社会が大混乱している中においても、これだけ多くの方々放射線や原子力の重要性を認識し、高い関心を持って受講して下さったことを示しています。

今、まだ感染が終息しない状況ではありますが、新型コロナウイルス出現後の社会、すなわちポスト・コロナ社会の在り方について議論が始められつつあります。新型コロナウイルス感染症の影響は、経済や社会システムなど、さまざまな領域まで及ぶと思われませんが、私たちの身近なところとして、原子力分野での教育・研究や、日本原子力学会や当部会の活動についても、ポスト・コロナの在り方を考え直さなくてはいけないかもしれません。あるいは、考え直す良い機会になるかもしれません。例えば、2020年の秋の大会は、現地開催からオンライン開催に変更になりました。これが順調に実施されれば、その実績をもとに、それ以降もオンラインで良いのではとの意見も出てくるかと思えます。当部会の夏期セミナーや週末基礎講座も同様です。ただ、ここで注意しないといけないのは、オンラインは万能ではないことです。例えば、オンライン教育では、オンライン授業とは別に、実習・実験、討論などを行うことで、オンライン授業で学んだ知識の理解を深化させ、定着させることが重要とされています。

部会の活動はこれからますます重要になると思います。高レベル放射性廃棄物の地層処分、福島第一原子力発電所の廃炉など、昭和・平成の時代から山積された多くの課題があります。MOOCの受講生数が示すように、これらに対する社

会的な関心は高く、当部会に多くのことが期待されています。新型コロナウイルス感染症で出鼻を挫かれた感はありますが、令和の時代にこれらの問題を見事に解決できればと思います。そのためには、まずは、部会員相互の理解と信頼を高め、一致団結して課題に取り組んでいくことが重要です。これはオンラインだけでは対応できません。今は「3密」状態を避けなくてはなりません。このコロナ禍を克服できた暁には、多くの部会員が1つの会場にマスクなしで密に集まって、ときに口角泡を飛ばしながら、バックエンドの未来について熱く意見を交わすことが必要ではないでしょうか。その日が1日も早く到来し、当部会がそうした場を提供できることを願っています。

末筆になりますが、皆様のご健康を祈念致しますとともに、引き続き当部会へのご支援をどうかよろしくお願い申し上げます。

(2020年5月)